

# 攻撃性に関する横断的研究

## — 小学生から大学生まで —

朝長昌三・福井昭史・地頭菌健司

中村千秋・小原達朗・柳田泰典

### はじめに

文部科学省(2009)は、平成20年度における児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査結果を報告し、その主な特徴をあげている。すなわち小、中、高等学校における暴力件数は約6万件で、小、中学校においては過去最高の件数であること。また小、中、高、特別支援学校におけるいじめの認知件数は約8万5千件で、前年度より約1万6千件の減少であると報告している。

近年、攻撃性の研究が盛んに行われるようになった。その理由としては、現代社会に暴力や犯罪が増してきたためともいわれているし、また攻撃性の概念が細分化されたことによって、細分化された攻撃性が健康や問題行動とのかかわりに違いがあるということが明らかにされたことにもよる。

就学前期から学童期にかけて、さまざまな認知能力が発達することや、仲間との相互作用のなかでさまざまなルールを身につけることによって、攻撃行動は望ましくないということを学習した結果、学童期を通して多くの子どもは攻撃行動を示さなくなってくる。しかし、何名かの少数派が攻撃によって仲間や親、教師を悩ますことになる。この時期の攻撃行動で考えられる攻撃として反応的攻撃がある。反応的攻撃は衝動性と深くかかわり、情緒制御がうまく働かないことが攻撃の発動にかかわるとされている。

朝長らはこれまで、子どもの反応的攻撃について身体的攻撃、言語的攻撃、短気および敵意の4特性から研究を行ってきた。小学生の攻撃性(2007, 2008)に関しては、男女ともに表出性攻撃の方が不表出性攻撃よりも大という結果を得た。中学生の攻撃性(2007, 2009)に関しては、男子では身体的攻撃が他の3特性よりも大であったが、女子では1年生は身体的攻撃が最も大であったが、2年生と3年生は敵意が最も大であるという結果を得た。高校生(2008, 2009)に関しては、男子では身体的攻撃が最も大で、女子では敵意が最も大であった。大学1年生の攻撃性に関しては、男女ともに敵意が最も大であった。

以上のように、われわれは小学校4年生から大学1年生までの攻撃性について検討してきた。

そこで、本研究では小学校4年生から大学1年生までの攻撃性を攻撃性の身体的攻撃、言語的攻撃、短気および敵意の4特性から横断的に検討することを目的とした。

### 方 法

#### (1) 回答者

小学校4年生が624名(男児322名, 女児302名), 5年生が663名(男児327名, 女児336名),

6年生が716名(男児342名, 女児374名)であった。中学生は1年生が1018名(男子515名, 女子503名), 2年生が998名(男子526名, 女子472名), 3年生が978名(男子502名, 女子476名)であった。高校生は1年生が1208名(男子592名, 女子616名), 2年生が1216名(男子589名, 女子627名), 3年生が1189名(男子611名, 女子578名)であった。大学生は200名(男子131名, 女子69名)であった。

## (2) 調査

調査は, 小学生に対しては小学生用攻撃性質問紙(HAQ-C), 中学生に対しては中学生用攻撃性質問紙(HAQ-S), 高校生と大学生に対しては日本版Buss-Perry攻撃性質問紙(BAQ)を用いて行った。これらの質問紙は攻撃性の行動的側面である「身体的攻撃」と「言語的攻撃」, 情動的側面である「短気」, 認知的側面である「敵意」の4特性を測定する下位尺度から構成されている。

小学生と中学生の回答者は各質問に対して「とてもよくあてはまる」, 「よくあてはまる」, 「あまりあてはまらない」, 「まったくあてはまらない」の4段階の1つに回答した。高校生と大学生の回答者は各質問に対して「非常によくあてはまる」, 「だいたいあてはまる」, 「どちらともいえない」, 「あまりあてはまらない」, 「まったくあてはまらない」の5段階の1つに回答した。

## 結 果

表1は, 小学校4年生から大学1年生までの攻撃性の学年変化で, 数値は平均値である。

表 1 攻撃性の学年変化

	男 子				女 子			
	身体的攻撃	言語的攻撃	短気	敵意	身体的攻撃	言語的攻撃	短気	敵意
小学校4年生	15.183	13.615	12.065	13.591	12.384	13.076	11.619	12.974
5年生	15.257	13.052	11.911	12.862	14.054	12.369	11.866	13.548
6年生	15.515	13.164	11.655	12.833	14.551	12.896	11.703	12.837
中学校1年生	15.251	13.148	12.994	13.322	14.679	13.076	13.219	13.331
2年生	16.152	13.044	13.127	13.614	13.951	12.305	13.648	14.419
3年生	15.639	13.213	12.251	13.295	13.301	12.393	13.048	13.539
高校1年生	18.809	15.277	13.514	18.189	16.279	14.963	14.336	17.779
2年生	18.629	15.545	13.883	18.273	16.416	15.031	14.153	17.761
3年生	19.242	15.322	14.038	18.133	16.407	14.836	14.431	17.803
大学1年生	17.886	14.771	13.275	18.366	14.319	13.522	12.639	17.579

## (1) 男子の攻撃性

### 1) 身体的攻撃

学年間にt-検定を行い, 以下のような結果を得た。

小学生においては, 大きい順に6年生, 5年生, 4年生であったが, 統計的にはそれぞれの間に有意な差はなかった。

中学生においては, 大きい順に2年生, 3年生, 1年生であった。2年生と3年生の間( $t=2.128$ )に有意な差があったが, 3年生と1年生との間には有意な差はなかった。

高校生においては, 大きい順に3年生, 1年生, 2年生であったが, それぞれの間に有意な差はな

かった。

さらに校種別にまとめた結果、大きい順に高校生 ( $\bar{x} = 18.898$ )、大学生 ( $\bar{x} = 17.886$ )、中学生 ( $\bar{x} = 15.684$ )、小学生 ( $\bar{x} = 15.322$ ) であった。また t-検定の結果、高校生と大学生との間 ( $t = 2.302$ )、大学生と中学生との間 ( $t = 6.244$ )、中学生と小学生との間 ( $t = 2.288$ ) に有意な差があった。

## 2) 言語的攻撃

小学生においては、大きい順に4年生、6年生、5年生で、4年生と6年生との間 ( $t = 2.085$ ) には有意な差があったが、6年生と5年生との間には有意な差はなかった。

中学生においては、大きい順に3年生、1年生、2年生であったが、それぞれの間に有意な差はなかった。

高校生においては、大きい順に2年生、3年生、1年生であったが、それぞれの間に有意な差はなかった。

校種別では、大きい順に高校生 ( $\bar{x} = 15.381$ )、大学生 ( $\bar{x} = 14.771$ )、小学生 ( $\bar{x} = 13.273$ )、中学生 ( $\bar{x} = 13.134$ ) であった。また高校生と大学生との間 ( $t = 2.043$ )、大学生と小学生との間 ( $t = 5.8111$ ) には有意な差があったが、小学生と中学生との間には有意な差はなかった。

## 3) 短気

小学生においては、大きい順に4年生、5年生、6年生であったが、それぞれの間に有意な差はなかった。

中学生においては、大きい順に2年生、1年生、3年生であった。2年生と1年生との間には有意な差はなかったが、1年生と3年生との間 ( $t = 3.373$ ) には有意な差があった。

高校生においては、大きい順に3年生、2年生、1年生であったが、それぞれの間に有意な差はなかった。

校種別では、大きい順に高校生 ( $\bar{x} = 13.814$ )、大学生 ( $\bar{x} = 13.275$ )、中学生 ( $\bar{x} = 12.798$ )、小学生 ( $\bar{x} = 11.873$ ) であった。また高校生と大学生との間、大学生と中学生との間には有意な差はなかったが、中学生と小学生との間 ( $t = 6.462$ ) には有意な差があった。

## 4) 敵意

小学生においては、大きい順に4年生、5年生、6年生であった。4年生と5年生との間 ( $t = 2.228$ ) には有意な差があったが、5年生と6年生との間には有意な差はなかった。

中学生においては、大きい順に2年生、1年生、3年生であったが、それぞれの間に有意な差はなかった。

高校生においては、大きい順に2年生、1年生、3年生であったが、それぞれの間に有意な差はなかった。

校種別では、大きい順に大学生 ( $\bar{x} = 18.366$ )、高校生 ( $\bar{x} = 18.198$ )、中学生 ( $\bar{x} = 13.413$ )、小学生 ( $\bar{x} = 13.089$ ) であった。また大学生と高校生との間には有意な差はなかったが、高校生と中学生との間 ( $t = 35.913$ )、中学生と小学生との間 ( $t = 2.040$ ) には有意な差があった。

## (2) 女子の攻撃性

### 1) 身体的攻撃

小学生においては、大きい順に6年生、5年生、4年生であった。6年生と5年生との間には有意な差はなかったが、4年生と5年生との間 ( $t=5.394$ ) には有意な差があった。

中学生においては、大きい順に1年生、2年生、3年生であった。1年生と2年生との間 ( $t=3.003$ )、2年生と3年生との間 ( $t=2.738$ ) には有意な差があった。

高校生においては、大きい順に2年生、3年生、1年生であったが、それぞれの間に有意な差はなかった。

校種別では、大きい順に高校生 ( $\bar{x}=16.367$ )、大学生 ( $\bar{x}=14.319$ )、中学生 ( $\bar{x}=13.990$ )、小学生 ( $\bar{x}=13.739$ ) であった。また高校生と大学生との間 ( $t=3.732$ ) には有意な差があったが、大学生と中学生との間、中学生と小学生との間には有意な差はなかった。

## 2) 言語的攻撃

小学生においては、大きい順に4年生、6年生、5年生であった。4年生と6年生との間には有意な差はなかったが、6年生と5年生との間 ( $t=2.602$ ) には有意な差があった。

中学生においては、大きい順に1年生、3年生、2年生であった。1年生と3年生との間 ( $t=4.245$ ) には有意な差があったが、2年生と3年生との間には有意な差はなかった。

高校生においては、大きい順に2年生、1年生、3年生であったが、それぞれの間に有意な差はなかった。

校種別では、大きい順に高校生 ( $\bar{x}=14.946$ )、大学生 ( $\bar{x}=13.522$ )、小学生 ( $\bar{x}=12.775$ )、中学生 ( $\bar{x}=12.601$ ) であった。また高校生と大学生との間 ( $t=3.559$ )、大学生と小学生との間 ( $t=2.153$ ) には有意な差があったが、小学生と中学生との間には有意な差はなかった。

## 3) 短気

小学生においては、大きい順に5年生、6年生、4年生であったが、それぞれの間に有意な差はなかった。

中学生においては、大きい順に2年生、1年生、3年生であったが、それぞれの間に有意な差はなかった。

高校生においては、大きい順に3年生、1年生、2年生であったが、それぞれの間に有意な差はなかった。

校種別では、大きい順に高校生 ( $\bar{x}=14.303$ )、大学生 ( $\bar{x}=13.913$ )、中学生 ( $\bar{x}=13.303$ )、小学生 ( $\bar{x}=11.732$ ) であった。また高校生と大学生との間、大学生と中学生との間には有意な差はなかったが、中学生と小学生との間 ( $t=11.393$ ) には有意な差があった。

## 4) 敵意

小学生においては、大きい順に5年生、4年生、6年生であったが、それぞれの間に有意な差はなかった。

中学生においては、大きい順に2年生、3年生、1年生であった。2年生と3年生との間 ( $t=3.827$ ) には有意な差があったが、3年生と1年生との間には有意な差はなかった。

高校生においては、大きい順に3年生、1年生、2年生であったが、それぞれの間に有意な差はなかった。

校種別では、大きい順に高校生 ( $\bar{x} = 17.780$ ), 大学生 ( $\bar{x} = 17.580$ ), 中学生 ( $\bar{x} = 13.753$ ), 小学生 ( $\bar{x} = 13.114$ ) であった。また高校生と大学生との間には有意な差はなかったが、大学生と中学生との間 ( $t = 8.714$ ), 中学生と小学生との間 ( $t = 4.178$ ) には有意な差があった。

### (3) 性差

#### 1) 身体的攻撃

##### ① 小学生

$t = 8.878$      $p < .01$      $df = 2001$

##### ② 中学生

$t = 12.170$      $p < .01$      $df = 2992$

##### ③ 高校生

$t = 16.234$      $p < .01$      $df = 3611$

##### ④ 大学生

$t = 5.418$      $p < .01$      $df = 198$

以上の結果のように、身体的攻撃に関しては、男子の方が大であった。

#### 2) 言語的攻撃

##### ① 小学生

$t = 4.077$      $p < .01$      $df = 2001$

##### ② 中学生

$t = 5.694$      $p < .01$      $df = 2992$

##### ③ 高校生

$t = 3.979$      $p < .01$      $df = 3611$

##### ④ 大学生

$t = 2.640$      $p < .01$      $df = 198$

以上の結果のように、言語的攻撃に関しては、男子の方が大であった。

#### 3) 短気

##### ① 小学生

$t = .908$     有意差なし

##### ② 中学生

$t = 4.029$      $p < .01$      $df = 2992$

##### ③ 高校生

$t = 3.780$      $p < .01$      $df = 3611$

##### ④ 大学生

$t = 1.138$     有意差なし

以上の結果のように、短気に関しては、小学生では男子の方が大であったが統計的には有意な差はなかった。中学生、高校生、大学生においては女子の方が大で、中学生と高校生では有意な差があったが、大学生では有意な差はなかった。

#### 4) 敵意

##### ① 小学生

$t = .138$  有意差なし

##### ② 中学生

$t = 2.537$   $p < .05$   $df = 2992$

##### ③ 高校生

$t = 3.177$   $p < .01$   $df = 3611$

##### ④ 大学生

$t = 1.400$  有意差なし

以上の結果のように、敵意に関しては、小学生と中学生では女子の方が大で、小学生では有意な差はなかったが、中学生では有意な差があった。高校生と大学生においては男子の方が大で、高校生では有意な差があったが、大学生では有意な差はなかった。

#### 考 察

本研究の目的は、小学校4年生から大学1年生までの攻撃性の推移を攻撃性の身体的攻撃、言語的攻撃、短気および敵意の4特性から横断的に検討することであった。

曾我ら(2000)は、児童の攻撃性と性格特性との関係について、児童の攻撃性に強い影響を与える性格特性として外向性と協調性の2特性をあげている。そして外向性は、攻撃性の4特性のすべてと関係し、特に短気と身体的攻撃に強い影響を与え、協調性は敵意に最も強く影響し、情緒性は言語的攻撃にのみ負の影響を示すとしている。

曾我(2001)は中学生の攻撃性と性格との関係について検討し、短気、身体的攻撃および言語的攻撃と強く関係しているのは外向性であり、敵意と最も強く関係しているのは協調性であるとしている。すなわち、外向性の高い人は、行動や情緒反応を抑制することが苦手なため、ささいなことに怒りを喚起しやすく、短気傾向を示すとした。また外向性は身体的攻撃や言語的攻撃と関係し、敵意は対人的要素の強い協調性と関係しているとした。

青年期になると不安定な発達の要因や青年特有の不安等が増大し、それらが攻撃行動の源となる可能性があると考えられている。このような発達の特徴をもつ青年期における攻撃性と性格との関連についての研究がある。すなわち敵意は情緒的分野にある怒りの程度に影響することや、不安や抑うつとも関係しているとしている。また大学生の孤立傾向は特に敵意と関係が強いという結果が得られている。

#### (1) 身体的攻撃

男子においては、小学校4年生から大学1年生までの間に有意な差( $F = 73.3074$ )があったことから、各学年間に差があることがわかった。すなわち小学生では、大きい順に6年生、5年生、4年生であったが、それらの間には統計的に有意な差はなかった。また中学生では2年生、3年生、1年生の順で、2年生と3年生の間には有意な差があった。高校生では3年生、1年生、2年生の順であったが、それらの間には有意な差はなかった。また大学生になると高校生よりも高まりが低下した。以上のように、小学生では学年が上がるごとに高まりが大きくなり、中学生では2年生で最も大になり、

3年生で低下した。高校生になると小・中学生に比べて高まりがより大きくなり、3年生で最も大きくなるが、大学生では低下した。次に、校種毎に検討したところ、大きい順に高校生、大学生、中学生、小学生で、これらの間に有意な差があった。

以上のことから、男子の身体的攻撃は小学生よりも中学生、そして高校生になると高まりが顕著に大きくなり、3年生で最も大きくなるが、大学生になると低下するということがわかった。すなわち男子は学年が上がるにつれてより活動的になり、自己顕示や自己主張がますます強くなり、さらには怒りなどの感情を抑えるのが苦手で、身体的攻撃を発動する傾向が強くなると考えられる。

女子においては、小学校4年生から大学1年生までの間に有意な差 ( $F=51.369$ ) があったことから、各学年間に差があることがわかった。すなわち小学生では、大きい順に6年生、5年生、4年生で、6年生と5年生との間には有意な差はなかったが、5年生と4年生との間には有意な差があった。また中学生では1年生、2年生、3年生の順で、それらの間に有意な差があった。高校生では2年生、3年生、1年生の順であったが、それらの間には有意な差はなかった。しかし大学生になると低下した。以上のように、小学生では学年が上がるごとに高まりが大きくなり、中学生では学年が上がるごとに低下し、高校生では学年が上がるごとに少しずつ高まり、大学生になると低下するという傾向であった。校種毎では、高校生、大学生、中学生、小学生の順で、高校生と大学生との間には有意な差があったが、大学生と中学生および中学生と小学生との間には有意な差はなかった。

以上のことから、女子の身体的攻撃は小学生では学年が上がるごとに大きくなり、中学生では学年が上がるごとに低下し、高校生になると顕著に大きくなったまま安定するが、大学生になると中学生の水準にまで低下するという傾向を示した。すなわち女子は男子と異なり、中学1年生を過ぎると怒りなどの感情を抑えるようになるが、高校生になると、2年間の反動からか怒りなどの感情を強く発するようになるが、大学生になると落ち着くものと考えられる。

## (2) 言語的攻撃

男子においては、小学校4年生から大学1年生までの間に有意な差 ( $F=67.418$ ) があったことから、各学年間に差があることがわかった。すなわち小学生では、大きい順に4年生、6年生、5年生で、4年生と6年生との間には有意な差があったが、6年生と5年生との間には有意な差はなかった。また中学生では3年生、1年生、2年生の順であったが、それらの間には有意な差はなかった。高校生では2年生、3年生、1年生の順で、それらの間には有意な差はなかった。大学生になると高校生よりも低下した。以上のように、小学生では4年生が最も大で、5年生になると低下し、6年生でわずかに大きくなるという傾向を示した。中学生では2年生で1年生よりもわずかに低下し、3年生で大きくなるという傾向を示した。高校生では2年生で1年生よりも大きくなり、3年生で低下するという傾向を示した。校種毎では高校生、大学生、小学生、中学生の順で、高校生と大学生の間および大学生と小学生との間には有意な差があったが、小学生と中学生との間には有意な差はなかった。

以上のことから、男子の言語的攻撃は小学生から中学生まではほとんど変わらないが、高校生になると顕著に大きくなり、大学生になると低下するという傾向を示した。すなわち男子の情緒性は中学校3年生までは比較的安定しているが、高校生になると他人の思惑に敏感で、緊張や不安が強くなり、何事にも自信がなく落ち込みやすくなる傾向が強まった結果、言語的攻撃が高まると考えられた。

女子においては、小学校4年生から大学1年生までの間に有意な差 ( $F=74.337$ ) があったことから、各学年間に差があることがわかった。すなわち小学生では、大きい順に4年生、6年生、5年生で、4年生と6年生との間には有意な差はなかったが、6年生と5年生との間には有意な差があった。また中学生では1年生、3年生、2年生の順であったが、1年生と3年生との間には有意な差があったが、3年生と2年生との間には有意な差はなかった。高校生では2年生、1年生、3年生の順で、それらの間には有意な差はなかった。大学生になると高校生よりも低下した。以上のように、小学生では4年生が最も大で、5年生になると低下し、6年生になるとわずかに高まるという傾向を示した。中学生も同じような傾向であった。高校生では1年生よりも2年生で高まり、3年生で低下しさらに大学生で低下するという傾向であった。校種毎では高校生、大学生、小学生、中学生の順で、高校生と大学生および大学生と小学生との間には有意な差があったが、小学生と中学生との間には有意な差はなかった。

以上のことから、女子の言語的攻撃性は小学生と中学生は同じような変化を示したが、高校生では攻撃性が大きく高まり、大学生になると低下するという傾向を示した。すなわち女子も男子とおなじような傾向で、高校生になるとより大きく情緒性が高まった結果、それまでとは違う大きな言語的攻撃が発現するものと考えられた。

### (3) 短気

男子においては、小学校4年生から大学1年生までの間に有意な差 ( $F=23.061$ ) があったことから、各学年間に差があることがわかった。すなわち小学生では大きい順に4年生、5年生、6年生で、それらの間に有意な差はなかった。また中学生では2年生、1年生、3年生の順で、1年生と3年生の間には有意な差があった。高校生では3年生、2年生、1年生の順で、それらの間には有意な差はなかった。大学生では高校生よりも低下した。以上のように、小学生では学年が上がるにつれて低下し、中学生では2年生で1年生よりも高まるが、3年生になると低下した。高校生では学年が上がるにつれて少しずつ高まり、大学生では低下するという傾向を示した。校種毎では、高校生、大学生、中学生、小学生の順で、高校生と大学生および大学生と中学生との間には有意な差はなかったが、中学生と小学生との間には有意な差があった。

以上のことから、男子の短気は小学生よりも中学生、中学生よりも高校生と高まり、しかも3年生で最も大きくなるが、大学生になると低下するという傾向であった。すなわち男子は行動や情緒反応を抑制することが苦手なために、中学校、高校と進むにつれて短気傾向が増すものと考えられた。

女子においては、小学校4年生から大学1年生までの間に有意な差 ( $F=39.108$ ) があったことから、各学年間に差があることがわかった。すなわち小学生では、大きい順に5年生、6年生、4年生で、それぞれの間に有意な差はなかった。また中学生では2年生、1年生、3年生の順であったが、それぞれの間に有意な差はなかった。高校生では3年生、1年生、2年生の順で、それらの間には有意な差はなかった。大学生になると高校生よりも低下した。

以上のように、女子の短気に関しては、小学生ではほとんど変化はなく、中学生では1年生よりも2年生で高まり、3年生では低下するという傾向であった。高校生では1年生よりも2年生で低下し、3年生で高まるが、大学生になると低下するという傾向を示した。すなわち女子の場合、中学校や高



校を通じて、男子よりもささいなことに怒りを喚起しやすい短気傾向が強いといえた。

#### (4) 敵意

男子においては、小学校4年生から大学1年生までの間に有意な差 ( $F=194.865$ ) があったことから、各学年間に差があることがわかった。すなわち小学生では、大きい順に4年生、5年生、6年生で、4年生と5年生との間には有意な差があったが、5年生と6年生との間には有意な差はなかった。また中学生では2年生、1年生、3年生の順であったが、それらの間には有意な差はなかった。高校生では2年生、1年生、3年生の順で、それらの間に有意な差はなかった。さらに、大学生になってもより大きくなるという傾向があった。以上のように、小学生では学年が上がるにつれて低下する傾向があった。中学生では2年生が1年生よりも大で、3年生になるとわずかに低下する傾向がみられた。高校生においても中学生と同じような傾向であった。校種毎では大学生、高校生、中学生、小学生の順で、大学生と高校生との間には有意な差はなかったが、高校生と中学生および中学生と小学生との間には有意な差があった。

以上のことから、男子の敵意は小学生から中学生と学年が上がるにつれてより大になっていき、高校生になると高まりが顕著に大きくなり、大学生になるとさらに大きくなるという傾向を示した。すなわち男子の場合、人間関係を重視し、他人の気持ちを思いやり、共感や信頼を強く感じる傾向である協調性が、高校生になると中学生時代に比べると非常に悪くなり、大学生になってもさらに増すということがわかった。

女子では、小学校4年生から大学1年生までの間に有意な差 ( $F=153.675$ ) があったことから、各学年間に差があることがわかった。すなわち小学生では、大きい順に5年生、4年生、6年生で、それらの間に有意な差はなかった。また中学生では2年生、3年生、1年生の順で、2年生と3年生の間には有意な差はあったが、3年生と1年生の間には有意な差はなかった。高校生では3年生、1年生、2年生の順で、それらの間に有意な差はなかった。大学生になるとわずかに低下した。以上のように、小学生では4年生よりも5年生で大きくなり、6年生では低下した。中学生においても同じような傾向を示した。高校生ではほとんど変化がなく、3年生でわずかに大きくなった。校種毎では高校生、大学生、中学生、小学生の順で、大学生と高校生との間には有意な差はなかったが、大学生と中学生および中学生と小学生との間には有意な差があった。

以上のことから、女子の敵意は小学生よりも中学生が大で、高校生になると高まりが顕著に大きくなるが、大学生ではやや低下するという傾向を示した。すなわち女子の場合、男子と同じように高校生になると協調性が非常に乏しくなることがわかった。

#### (5) 性差

##### 1) 身体的攻撃

全学年で男子の方が女子よりも大で、統計的にも有意な差があった。中学生までは男子では中学2年生が、女子では中学1年生が最も大きな高まりを示した。高校生になると男女ともに中学生のときよりも顕著な高まりを示し、3年生のときに最大の高まりを示した。大学生になると共に低下した。すなわち男子は女子に比べると、行動や情緒反応を抑制することが苦手で、ささいなことに怒りを喚起しやすい傾向が高いと考えられる。

## 2) 言語的攻撃

全学年で男子の方が女子よりも大で、統計的にも有意であった。また同じような高まりの傾向を示した。すなわち小学生では4年生が最も大で、5年生になると低下し、6年生になると高まった。また中学生では2年生で低下し3年生で高まった。高校生になると大きく高まり、2年生で最大となり、3年生で低下し、大学生になるとさらに低下した。すなわち男子は女子に比べて、他人の思惑に敏感で、緊張や不安が強く、何事にも自信がなく落ち込みやすい傾向が強いと考えられる。

## 3) 短気

小学生では学年が上がるごとに男子では低下するのに対し、女子は高まるという傾向であったが、統計的には有意な差はなかった。中学生から高校生まで女子の方が男子よりも大で、統計的にも有意であった。また同じような高まりの傾向を示した。すなわち中学生では2年生が最も大きな高まりを示し、高校生では3年生で最も大きな高まりを示した。そして大学生になると男女ともに低下したが、有意な差はなかった。すなわち、どちらかといえば女子の方が男子よりもささいなことに怒りを喚起しやすく、短気傾向を示すことが強いと考えられる。

## 4) 敵意

小学生では学年があがるごとに男子は低下傾向を示したが、女子は5年生で最も高まり、6年生で低下傾向を示した。しかし有意な差はなかった。中学生では女子の方が大で有意な差があった。また男女ともに2年生で最も大きな高まりを示した。高校生では男女ともに中学生に比べると大きな高まりを示し、しかも男子の方が大で、有意な差があった。大学生では男子の方が大で、しかも高校生よりも高まりが大きくなったのに対し、女子ではわずかではあるが低下した。すなわち小学校5年生から中学校3年生までは、女子の方が協調性は低いが、高校以降は男子の方が協調性が低く、さらには孤立傾向が強まると考えられた。

## 要 約

本研究の目的は、小学校4年生から大学1年生までの攻撃性の推移を攻撃性の身体的攻撃、言語的攻撃、短気および敵意の4特性から横断的に検討することであった。

### (1) 男子の攻撃性

#### 1) 身体的攻撃

- ① 小学生においては、大きい順に6年生、5年生、4年生であった。
- ② 中学生においては、大きい順に2年生、3年生、1年生であった。
- ③ 高校生においては、大きい順に3年生、1年生、2年生であった。
- ④ 校種別では、大きい順に高校生、大学生、中学生、小学生であった。

#### 2) 言語的攻撃

- ① 小学生においては、大きい順に4年生、6年生、5年生であった。
- ② 中学生においては、大きい順に3年生、1年生、2年生であった。
- ③ 高校生においては、大きい順に2年生、3年生、1年生であった。
- ④ 校種別では、大きい順に高校生、大学生、小学生、中学生であった。

### 3) 短気

- ① 小学生においては、大きい順に4年生、5年生、6年生であった。
- ② 中学生においては、大きい順に2年生、1年生、3年生であった。
- ③ 高校生においては、大きい順に3年生、2年生、1年生であった。
- ④ 校種別では、大きい順に高校生、大学生、中学生、小学生であった。

### 4) 敵意

- ① 小学生においては、大きい順に4年生、5年生、6年生であった。
- ② 中学生においては、大きい順に2年生、1年生、3年生であった。
- ③ 高校生においては、大きい順に2年生、1年生、3年生であった。
- ④ 校種別では、大きい順に大学生、高校生、中学生、小学生であった。

## (2) 女子の攻撃性

### 1) 身体的攻撃

- ① 小学生においては、大きい順に6年生、5年生、4年生であった。
- ② 中学生においては、大きい順に1年生、2年生、3年生であった。
- ③ 高校生においては、大きい順に2年生、3年生、1年生であった。
- ④ 校種別では、大きい順に高校生、大学生、中学生、小学生であった。

### 2) 言語的攻撃

- ① 小学生においては、大きい順に4年生、6年生、5年生であった。
- ② 中学生においては、大きい順に1年生、3年生、2年生であった。
- ③ 高校生においては、大きい順に2年生、1年生、3年生であった。
- ④ 校種別では、大きい順に高校生、大学生、小学生、中学生であった。

### 3) 短気

- ① 小学生においては、大きい順に5年生、6年生、4年生であった。
- ② 中学生においては、大きい順に2年生、1年生、3年生であった。
- ③ 高校生においては、大きい順に3年生、1年生、2年生であった。
- ④ 校種別では、大きい順に高校生、大学生、中学生、小学生であった。

### 4) 敵意

- ① 小学生においては、大きい順に5年生、4年生、6年生であった。
- ② 中学生においては、大きい順に2年生、3年生、1年生であった。
- ③ 高校生においては、大きい順に3年生、1年生、2年生であった。
- ④ 校種別では、大きい順に高校生、大学生、中学生、小学生であった。

## (3) 性差

- ① 身体的攻撃に関しては、全校種で男子の方が大であった。
- ② 言語的攻撃に関しては、全校種で男子の方が大であった。
- ③ 短気に関しては、小学生では男子の方が大であったが、他の校種では女子の方が大であった。
- ④ 敵意に関しては、小学生と中学生では女子の方が大であったが、高校生と大学生では男子の方

が大であった。

#### 参 考 文 献

- 市村操一 (2004) 怒りのコントロール ブレーン社
- 神田信彦・酒井久美代・杉山成 (2005) なぜ攻撃してしまうのか ブレーン社
- 文部科学省 (2009) 平成 20 年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」について 文部科学省
- 島井哲志・山崎勝之 (2002) 攻撃性の行動科学—健康編 ナカニシヤ出版
- 朝長昌三・福井昭史・小島道生・中村千秋・小原達朗・柳田泰典 (2006) 小学生の表出性攻撃と不表出性攻撃に関する研究 長崎大学教育学部紀要, 70, 81-96.
- 柳田泰典・朝長昌三・中村千秋・小原達朗・福井昭史・小島道生 (2006) 子どもの攻撃性と他者認識 長崎大学教育学部紀要, 70, 1-15.
- 朝長昌三・福井昭史・小島道生・中村千秋・小原達朗・柳田泰典 (2006) 中学生の攻撃性に関する研究 長崎大学教育学部教育実践総合センター紀要, 第 5 号, 183-200.
- 朝長昌三・福井昭史・小島道生・中村千秋・小原達朗・柳田泰典 (2007) 小学生の攻撃性に関する研究 長崎大学教育学部紀要, 71, 49-59.
- 朝長昌三・福井昭史・小島道生・中村千秋・小原達朗・柳田泰典 (2007) 中学生における攻撃性の傾向に関する研究 長崎大学教育学部教育実践総合センター紀要, 第 6 号, 1-13.
- 朝長昌三・福井昭史・地頭菌健司・小島道生・中村千秋・小原達朗・柳田泰典 (2008) 児童生徒の特性からみた生徒指導の質的改善—高校生の攻撃性 について— 長崎大学教育学部紀要, 72, 37-48.
- 朝長昌三・福井昭史・小島道生・中村千秋・小原達朗・柳田泰典 (2008) 児童生徒の特性からみた生徒指導の質的改善—小学生の攻撃性について— 長崎大学教育学部教育実践総合センター紀要, 第 7 号, 11-22.
- 朝長昌三・福井昭史・地頭菌健司・小島道生・中村千秋・小原達朗・柳田泰典 (2009) 児童生徒の特性からみた生徒指導の質的改善—中学生の攻撃性について— 長崎大学教育学部紀要, 73, 17-30.
- 朝長昌三・福井昭史・小島道生・中村千秋・小原達朗・柳田泰典 (2009) 生徒指導の質的改善に関する実証的研究—高校生の攻撃性について— 長崎大学教育学部教育実践総合センター紀要, 第 8 号, 1-13.
- 山崎勝之 (2002) 攻撃性の行動科学—発達・教育編 ナカニシヤ出版